

分水嶺

「太巻き祭りずし」に魅せられて	龍崎英子.....	3
連載 / 教育のひろば		
「からだ」で学ぶ	徳山郁夫.....	4
特集 / 道徳の授業 「子どもの心の高まり」を期待して		
道徳授業に臨む	上杉賢士.....	6
わたしはこんなことを考えて授業に臨む		
* 教師の願い・感動を授業に結びつけよう	佐藤佳子.....	8
* 資料選択の前に考えておきたいこと	木村睦男.....	10
* 道徳の授業の前におさえない5つのポイント	小林優子.....	12
* 授業に協力してくれる人はいないかな	佐藤 悟.....	14
* 子どもとともに、よりよい生き方を考える道徳の授業をめざして	本庄裕子.....	16
* 「学習の方向性」を明確化する	北川 忠.....	18
連載 / わたしの提言		
子どもが、道徳について、親や友達と会話をするようにしよう	渡邊達生.....	20
連載 / 研究会紹介(埼玉県)		
「年をとることへの畏敬の念」を深く刻む道徳教育	藤田清千.....	22
連載 / 道徳の授業 - Q & A		
「話し合い活動」について	山内良夫.....	24
新連載 / 明日の教育を考える		
新しい教育についての考え方	山本恒夫.....	26

● 著者プロフィール ●



龍崎英子先生 千葉伝統郷土料理研究会主宰。昭和31年、房総地方の「太巻きずし」に出会って以来、この技術の伝統と普及、創作活動等に努めている。現在、「太巻きずしの講師」のためのゼミを開講し、食育指導に役立つ講師を目指している。



徳山郁夫先生 大学ではフリーライティング、グループワークによる冒険教育の実技授業を。生涯にわたって学ぶべきこと、すなわち「普遍の人間らしさ」について、映像や体験学習を通してわかりやすく伝えることをライフワークとしている。



上杉賢士先生 最近、法務省や経済産業省など、省庁から委託された仕事が増加。それだけ、教育的問題が多様になったということを実感します。「道徳」という枠組みを、その本質を維持しながら押し広げて考えてみる必要を痛感しています。



佐藤佳子先生 昨年は、名古屋市全体がEXPO2005「愛・地球博」に終始した1年でした。関連グッズはいまだに売れ行き好調という怪現象が続いております。現在、教頭として小学校に勤務しており、道徳の授業とはやや疎遠になっています。



木村睦男先生 全小道研大分大会へのご参加、ありがとうございます。全国の先生方のご指導を、今後の県の道徳教育の発展や自分自身の研究の糧にするとともに、今年度も、たくさんの先生方と道徳教育について語り合いたいと思います。



小林優子先生 今年度の4月から、花と緑あふれる埼玉県川口市に転勤しました。しだれ桜をはじめ、多くの木々や花々のあまりの美しさに感動しながら、毎日を楽ししく通勤しています。当面の目標は、新しい職場を知ることになるでしょうか。



佐藤 悟先生 前任校では「児童生徒の心に響く道徳推進事業」に取り組みしました。現在の学校は「学力向上拠点形成事業」に取り組んでいますが、学力向上も“心の教育”が基盤であると考え、先生方といっしょに道徳を研究しています。



本庄裕子先生 9年ぶりに1年生を担任しました。1年生の意欲旺盛な遊び・学習する姿に感動！ 協力してくださった地域、保護者の方に感謝の1年でした。桜の花が咲く季節になりました。今年はどんな出会いがあるのでしょうか。楽しみです。



北川 忠先生 雪国に育った身でも、今期の例年より一足早い大雪にはびっくり。つるつるに凍った道路のことを金沢では「きんかんまなま」といいます。言葉のおもしろさに加え、金沢の雪とともに生きる豊かな文化を誇りに思います。



渡邊達生先生 「家族のいい話(エッセー・公募)の作品集を発行しました。「親の思い・子どもの思い・親子の思い」の三分野で構成されています。インターネットでも公開。ヤフーやグーグルで「家族生き生きエッセー」を検索してください。



藤田清千先生 道徳教育のプロのいない単級学校13人で、文部科学省委託事業をお受けしてしまうなど、恐れを知らぬ所業でした。ご指導いただいた先生方のおかげもあり、何とか責任は果たせたかなと思う年度末です。



山内良夫先生 今年度4月より、「校内特別支援教育」がスタートします。LD児・ADHD児・高機能自閉症児.....と、学ぶべき課題は山積みですが、「だれと・どこで・だれが・どのように」の当面の課題に、ひとつずつチャレンジです。



山本恒夫先生 筑波大学名誉教授、教育学博士、日本生涯教育学会常任顧問(元会長)。中央教育審議会委員、臨時委員などを歴任。『21世紀生涯学習への招待』(協同出版)、『生涯教育「答申」ハンドブック』(共著編/文恵堂)など著書多数。

「太巻き祭りずし」に魅せられて

千葉伝統郷土料理研究会会長 龍崎 英子

私は40年来、房総の「太巻き祭りずし」の技術蒐集と技術の伝承活動に努めてきました。

主宰する千葉伝統郷土料理研究会も28年目を迎え、その成果として技術保持者としての講師たちは数十名になり、先輩の意志を受け継いで次世代に伝えるべく努力をしております。その間に発行した手引きの著書は、和英対訳のものを加えて6冊、VHS・DVDは5種類となり、この「太巻き祭りずし」に関心を寄せてくださる愛好家の多さに感謝していますが、その一方で取材に快く応じてくださった農婦の方々の一言一言があらためて思い出されます。それらを紹介してみましょ。

♡季節の花を巻くときの話。「アヤメの葉は、すっきりと細くね。太い葉だと葉蘭のようでおかしいのよ。また、桃の花が咲いているときは葉はないから、アクセサリー的にほうれん草の緑をあしらうのよ。」これに対して私の会員某は、「桃の花には小さな葉がついているけど……。」そこで確かめてみたら小さな葉がついていましたが、まさにアクセサリー的でした。

♡「さらし(晒し布)の布巾は重宝だよ。飯台の飯粒もしゃもじの飯粒もこうしてきれいにとれるのさ。はた目にもきれいな仕事ってわけよ。」なるほど、K女の仕事ぶりは、さすがにご飯一粒だに落ちていませんでした。故 龍崎きくさんです。

♡「“寿”って文字を巻きたいと思ってるんだけど……こうして海苔、干瓢、ご飯と積み上げて中央を包丁で切り、海苔をはさみたいのに……左右がうまくいかないね。」そこで「海苔で干瓢をはさんでみたら？」と提案したら「あっ、これはいい考えだ。」って受け入れてくれました。この素直さには驚きでした。故 石橋マサさんです。

♡「さんがいの松」を教わったときのことです。当時の私にとっては複雑な手順でした。

「こうやって覚えるのよ。かのかのかのこと積み上げて 枝もしっかり幹太く これぞ我が家の 五葉松」なるほど。「か=干瓢のか」「の=海苔のの」「こ=ご飯のこ」、具の積み上げ順の覚え方です。和歌のたしなみがあればこそ歌に詠み込むことができたのです(注/当時は松の緑は食用青粉で色づけした煮干瓢を使用していました)。故 古内千代さんです。

♡東金市の木村家で名人たちから「ダイヤモンド」を教わったときのこと。「なぜダイヤ?」の問いに、「金色夜叉のお宮じゃないが、わたしらだってダイヤは欲しいさ。でも買ってもらえんから、こうしてずしに巻き込んで楽しんでいるのよ。」とあっけらかんな言葉。さすが昔の教養ある老女学生たち 俳句も和歌もたしなむ素敵な80代でした。

♡私の小学校5・6年の担任は感性豊かな先生でしたが、昨年87歳で他界されました。著書に関しても、先生にはその都度、助言をいただき励ましていただきました。あるとき、「太巻き祭りずしには、88回の手間をかけて収穫した自分の米を、おいしく美しく仕上げて他人様に食べさせたいという農婦のやさしさが込められているわね。」と言われハッとしました。人のやさしさをこのように表現された恩師こそ、真のやさしさに生きた教師だとあらためて頭の下がる思いでした。故 田畑(川嶋)淑子先生です。

この「太巻き祭りずし」には、単にすばらしい技術だけではなく、教えてくださった農婦の方々の自然を見つめるやさしさと豊かな創造力にあふれています。

「文様を通して伝えたいことは何か?」それは、いつも自然界と対話をしながら食べる(いただく)のを忘れるな、ということかもしれません。



「からだ」で学ぶ

千葉大学環境健康フィールド科学センター教授 徳山 郁夫

『世界がもし100人の村だったら』という本をご存知だろうか。私は、大学生の最初の授業にこの本から次の箇所を引用して話をします。「世界がもし100人の村だったら、村人のうち1人が大学の教育を受け、2人がコンピューターをもっています。けれど、14人は文字が読めません。」

エリートという言葉をどのように解釈するか、好き嫌いはあると思います。大学全入時代などと称され、大学に進学することが当たり前になりつつある日本ですが、地球規模の視点でみたら、大学で学ぶ機会を得ることがいかに希少であり、学ぶ機会を十分に与えられている者は、同時にその背中に背負わされる責任の大きさがあるということを想像してほしいからです。

「将来のために何か資格取得を目指したい」という進学動機を聞くこともあります。明確な目標設定をしての進学であり、悪いとは思いません。しかし、正直なところ、私はどこかもの足りなさを感じてしまいます。いったい、学ぶということをどのようにイメージしているのでしょうか。

“学ぶ”ということばの起源に“真似”を挙げられることがあります。正確な起源はわかりません。しかし、“真似”は、見たり・聞いたりというように、あくまでも正しいモデルを前提とした模範に対する模倣のようにイメージされます。試行錯誤。繰り返しトライすることから適正な行動を見つけ出すことも重要な学びではないでしょうか。そして、このプロセスは単に“真似”ではなく、“創造”

さえも含んでいるように思います。

テレビを視たり新聞を読んだりすることで世の中のすべてをわかったような気になってしまうのは、子どもたちだけではありません。私たち大人も居ながらにして、何でもわかっている立派な評論家を気取っています。実際に事件が起きている遥か遠くから、第三者として眺めていることが多すぎる世の中です。遥か遠くで起きている事件を雄弁に語れたとしても、実際に身近に事件が起きたときには見て見ぬ振りをしてやり過ごしてしまうことがありえるのではないのでしょうか。第三者として眺めて理解することに慣れすぎて、生身の人と人が向き合った“あいだ”に交流する感情、行動、そしてそこからわかることを軽視している傾向はないのでしょうか。

その場に居合わせることで「からだ」で感じること、例えば、心地よさ、恥ずかしさ、恐ろしさ、嬉しさ、悔しさ、悲しさなどは、真似では学べません。また、「からだ」のなかに溢れ出るこれらの感情は、理屈で蓋をすることもできません。それらの感情を踏まえた行動。そして、他者の感情や行動に向き合い、交錯するお互いの自己主張の行方に責任を持つことこそが“現実”を生きることの学びではないのでしょうか。

私たちの教育では、“自己主張”、“意思決定”をどのように位置づけ、どのように扱ってきたでしょう。日本には“我慢”を美德とするところがあり、親や先生の“言うことを聞く”ということは、“言われたことに従う”ことを意味してきたのではないのでしょうか。このよ



うな教育の構造の背景には、“命令 - 服従，そして忍耐”という図式が隠されています。つまり，子どもたちが学ぶべきことは，“服従と忍耐”になります。極端な言い方をすれば，わからなくてもいい，言うことを聞きなさい，ということでしょうか。こんな図式のなかで，“からだ”はただひたすら“耐えるもの”として位置づけられてきたのかもしれませんが。しかし「からだ」は，感じるものであり，行動するものであり，そして考えるものです。

客観的な立場で理解することに慣れすぎ，参加する意識が希薄になり醒めてしまったのかもしれませんが。人の言いなりになることに慣れすぎて，目の前の自己主張としっかり対峙することをしなくなってしまったのかもしれませんが。“その場”にしっかり参加する意識を堅持し，“その場”の行方に責任を持って関わることで，お互いが向き合うようになるのではないのでしょうか。相手が自分に求めてくることを通して，普段の自分には見えていなかった自分というものが見えてくるのではないのでしょうか。どんなにがんばっても，自分探しはひとりではできないものではないのでしょうか。

ピュアリリズム (Puerilism) ということがあります。ピュアリリズムとは「子どもを大人に引き上げようとはせず，逆に子どもの行動に合わせてふるまう社会，このような社会の精神的態度」のことです。ファシズムの嵐が吹き荒れる第二次大戦直前のヨーロッパでホイジンガが指摘しました。例えば，他者が自分とは立場が違うこと，異なる欲求や意志を持っていることなど，他者存在を深く理解できないまま大人になることもそのひとつではないのでしょうか。自発性と奉仕精神の欠如も特徴としています。正義や美意識に一貫性を欠いても，自分の利益を優先させるご都合主義をとります。自らを知的閉塞状況に置きながら，臆面もなく凡庸であることの権利を主張します。そして，自分たちが享受する豊かな生活を可能にするいっさいのものに

忘恩を常とします。

知識や話だけで学んでも，実際に真剣な場面で，真摯に他者と対峙することがなければ，他者の欲求や意志，痛みや感情を「からだ」で体得しなければ精神的に大人になれないのではないのでしょうか。それでも身体は成長し，腕力も備わり，性的な機能も成熟します。経済的に力を持つこともあれば，組織的・政治的権力を備えることもあります。しかし，精神的に成熟しない大人が“大きな力”を備えたときほど怖いものはありません。力をもって，他者を弄ぶ結果になることが目に見えています。

この文章を読む方の多くが真剣に子どもたちの将来を考え，道徳教育を考えているものと推測します。そして，毎日，真剣に子どもたちに話す教材を探しておられると思います。そしてまた，若年化する冷酷無残な犯罪を憂いておられるのではないかと推察します。しかし，否，だから，私は子どもたちが「からだ」で学ぶこと以上に，まず先生方，親御さん方，あらゆる大人にもう一歩，現状から踏み出して大人になることを「からだ」で学んでほしいと思っています。

子どもたちの目線から見える大人たちは，どのようなものでしょう。実は，口ではうまいこと言っても，言っていることとやっていることにギャップがあることは，見透かされています。豊かな喜びを共有し合っている魅力ある大人たちを現実の生活で見かけるのでしょうか。テレビを視たり，新聞を読むだけではなく，実際に暮らしているコミュニティでほかの人たちと生き生きと交流しているのでしょうか。その人がいることがほかの人の喜びを生み出しているのでしょうか。億劫なことも，骨が折れることも，痛みも厭わず，欲に駆られず，他者のために投げ出せる「からだ」を育てているのでしょうか。

私たちは，現実を「からだ」で生きているのですから。

道徳授業に臨む

千葉大学大学院教授 上杉 賢士

日常的な営みとしての道徳の時間

教育実践を語るとき、そのレベルは実にさまざまである。

時間をかけて緻密に練り上げた指導案を用い、念入りに設えた舞台装置のもとで展開される公開研究会の授業。実践の結果として報告される無機的な授業の実施時数。しかし、そのいずれもが日常的な営みとしての教育実践の実際を適切には伝えない。おそらく、この二つを両極とした尺度の中間に、授業実践の語り口としての多様な形態や方法が存在するのだろう。

子どもの成長を促す日常的な営みとしての道徳の時間のありようを、私たちはどのような語り口で伝えればよいのだろうか。本特集はそうした問題意識に基づいて編まれた。

わずか週1時間、しかし毎週必ずめぐってくる道徳の時間。そこでは、決して毎回指導案が用意されるわけではない。率直に言って、教育の現場にはそれほどの時間的ゆとりはない。かといって、良心的な教師たちは、用意された資料を漠然と子どもたちに提示するわけではなく、それなりの戦略をきちんと用意している。そうした積み重ねが、子どもの成長を促し教育の成果を積み上げる。

本特集では、道徳教育に熱心な先生方に登場していただき、毎週1時間の道徳の時間の前にどんな準備をして臨むかを率直に語っていただいた。

「骨太」に指導過程を構想する

実践者の方々に登場していただく前に、自分自身のことを語る。

大学教員に転じる前、私は学級担任として13年間小学校の教壇に立った（これに3年の教頭時代を加えた16年が、私の小学校教員歴）。その後半の10年ほどで、道徳の時間を曲がりなりにも研究的に実践していた。

今でこそ、道徳の時間を学校の計画に従って粛々とこなす教員は多くなったが、率直に言って当時はその確率はきわめて低かった。ある先輩から、「あなたの専門は何？」と問われた。「道徳です」と答えると、「だから、ほんとうの専門は何？」と重ねて問われた。道徳教育は専門とする領域とは認知されていなかったのである。そんな時代だった。

むろん、校内研や公開研究会などではかなり前から指導の構想を立て、指導案を丹念に練って授業に臨んだ。でも、それはせいぜい年に数回。それ以外の日は、たいした準備もせずに子どもたちと向かい合うこともしばしばであった。

ある時期から、二つのことを心がけるようになった。その一つは、授業の過程を二つか三つに大きく括って、授業に臨むようになった点である。むろん、それは紙に書き出すのではなく、あくまでアタマの中での準備のだが……。

その一つは、どんな資料をどのように使うかという点。当時から、既成の道徳資料にはかなりの疑いをもっていた。これをそのまま子どもたちに提示しても、彼らは決して元気にはならないだろうと思っていた。

したがって、1時間の授業が終わって1週間後の授業を迎えるまでのノルマは、資料を探すことにあった。万策尽きると副読本に頼る結果となるが、可能な限り「ナマ」の資料

を使おうと心がけた。

気に入った資料が見つかったら、次は使い方の検討を始める。一括提示とするか、分割提示とするか。あるいはまた別の方法を工夫するか。でも、この作業はそれほどの時間を必要としなかった。なぜなら、資料そのものの内容や構造がおのずとその結論を出してくれたからである。

「よい資料を見つけることが、授業の成否を決める」と、当時からも考えられていた。しかし、若年教師だった私は、「資料の選択」と「使用方法」の両方で決まると不遜にも考えていた。その信念は、今も変わらない。

「授業は調査」という感覚

日常の授業に臨む心構えの一つを資料の選択・活用に向けると、残りは一つか二つ。これをその後の授業展開に向けられるのだが、ここから先は結構ラブだった。

というのも、当時の（今でも）私には、「価値を教える」などという構えはみじんもなく、この資料のどこで子どもたちは敏感に、あるいはこだわりをもって反応するかを楽しんでいた風がある。言い換えれば、授業そのものは子ども理解のための格好の場であると考えていたからにはほかならない。端的に言えば、「授業は調査」であると考えていた。

こうして予期的構えをもたずに授業に臨むと、子どもたちは実にさまざまな顔を見せてくれる。あたかも内視鏡で心の内を覗くようなワクワクした気分に包まれる。子どもたちの等身大の実像がそこから見えてくる。

学生時代には教育心理学を専攻していたからその用語を使うならば、これは一種の「投影法」の発想である。資料のある部分にこだわりを見せることも、特定の場面で他とは異なる理解や解釈を示すことも、その子の内面が資料を媒体にして投影されたと思なすことができるからである。その世界は、実に多様で楽しかった。

この多様性にどう対応するか。その点だけ

はかなり真剣に準備していた記憶がある。

「見慣れないアングル」から見つめる

その当ても、既成の資料の多くは「起承転結」が適度に構成されていて、一読すれば資料に込められていたメッセージをたいていの子どもは読み取ってしまう。それでは、この資料（教材）と子どもの中に介在する教師の役割とは一体何か。それが、当時の私にとって最も重要な問いだった。

かなりの時間（年月）をかけて私が導いた結論は、「見慣れないアングルから見つめさせる」という授業原理だった。

たとえば、何かで困っているお年寄りがあったとする。この場合に生じる考えは、「何か手助けをしてやる」という発想。これは、「見慣れたアングル」である。それでは、「このお年寄りはどうしてほしいと思っているか」。これが、「見慣れないアングル」。つまり、教師が介在する意味の一つは、問題とされる事態に対して、通常では気づかない視点から見つめさせるということである。

これが数少ない「発問」となる。発問が骨太で洗練されていなければいほど、子どもたちの反応は多様になる。そして、それらを積み重ねるにしたがって、場面に対する子どもたちの想像はリアリティーを増す。それこそが、現実・具体の中で考えさせるための、教師の重要な役割であると考えていた。

後に、この授業技法に「視点の転換」とネーミングし、今に至っている。

以上、粗々に整理したが、この三つの作業はたいていの授業の前に行っていた。原理がシンプルであればあるほど、応用範囲は広い。そして、道徳の時間を前にして、準備にそれほど時間をかける必要もない。日常的な営みは、シンプルな基本原理と状況に応じた臨機応変の対応によってその質が決まる。発問を並べ立て、苦労して子どもたちを「正解」に誘導するような愚を犯す必要もなくなる。

教師の願い・感動を 授業に結びつけよう

名古屋市立井戸田小学校教頭 佐藤 佳子

提示資料についての現場での悩み

どの学校でも学習指導要領に基づいて道徳の年間指導計画を作成している。学年ごとに必要な道徳的な資質を養うために、計画にそって進めることは大切であり、また指導のよりどころは必要であり、年間指導計画を否定するつもりはない。

しかし、年間指導計画は、ある主題について、例示された資料を使って、しかも計画された時期に、道徳の授業をすることを前提に作成されているため、計画に縛られてしまっている。その結果、子どもたちの実態や教師の思いが生かされた授業がなされていない現実がある。

現在、名古屋市においては「名古屋市道徳研究会」という全市的な組織があり、年に1回、各学校の道徳主任を対象に、1年間の研究会での成果や課題について発表会

を行っている。

今年の2月に実施した発表会后、参加された先生方へのアンケートを実施したが、その中に、先生方の道徳の授業に対する意識を知ることができる興味深いデータがあった。

この、アンケートからわかるように、道徳の授業に対して悩みを持つ先生が多く、その悩みの多くは、道徳の授業に提示する資料についてであった。

この研究発表会の後日、各学校で道徳主任をしている20人ぐらいの先生方に、「子どもを引きつける道徳の授業」という演題で話をする機会を得た。ちょうどそこで、「資料」に関する私の考えをはじめ、授業に臨む心構えについての話をした。以下、そのときの内容をもとに、私の授業に臨む心構えについての考えを述べたい。

アンケート内容の抜粋

研究発表会についてよかった点や改善した方がよい点について

- ・学校へ持ち帰ってすぐに役立つので、本当に助かりました。
- ・道徳の授業について、自分と同じように悩んで、考えている方々がいらっしゃることに安心しました。部会に参加したいと思います。

名古屋市道徳研究会に対する意見や要望

- ・部会に参加すれば、すぐに授業に使える資料がもらえることが魅力。
- ・部会に参加できない方にとってもすごく助かるので、今後もたくさんの資料提供をしてほしい。

道徳の授業に臨む心構え

(1) 道徳教育における不易と流行の見極め

時代は変遷し、価値観も多様化、あるいは変化している。「知らない人に道を尋ねられたら、親切に教える。」……私たちが子どもたちには、りっぱな行為であった。現在は、「いたずらや誘拐される危険性があるから、とんでもない。」……ことである。しかし、よく考えてみると、時代は変遷しても、変わらない「不易」な側面はある。変化するのは、その表面的な部分であることを忘れてはならない。

困っている人に手を差し伸べる行為が否定されてはならない。「これだけは譲れない、これだけは教えずにはならない、これだけは守らせたい」と思うことは、絶対に譲らずに教えてほしい。

(2) 道徳の授業を行う前に

冒頭にも述べたが、年間指導計画にあるから授業をするという考えではなく、次の3つの観点から実施する主題や時期、資料を見直して、道徳の授業に取り組んでいただきたい。

① 学級の子どもの理解から

去年も3学年を担任したので、今年担任した3年生も、まったく同じように学級経営を進めることができると思う先生はいない。それと同じで、目の前にいる子どもたちの問題意識やこれまでの体験は、同じ年齢の集団でも毎年異なっている。

道徳の授業に際しても同じであり、友人関係のあり方、親切や勇気の実践力の程度、規則を遵守できる度合いなど、目の前の子どもたちを理解したうえで授業に臨むことが大切である。

② 社会情勢をタイムリーに

昨年、愛知万博「愛・地球博」が開催され、名古屋市では、すべての小・中・養護学校の児童・生徒がいろいろなイベントに

参加した。そこでは、さまざまな外国の人々との交流が行われ、道徳の授業にもその体験を資料として活用された先生が多くいた。

この場合の資料は、写真であったり、手紙であったり、作文であったりと、いわゆる副読本にはない資料ばかりである。しかし、子どもたちの体験に基づいている資料であるため、たいへん活気にみちた授業となった。

このように、現在の社会情勢から導き出されるテーマ、例えば、命の尊さ・平和・環境問題・マナーなどを、年間指導計画にはないものであっても、差し替える価値があるものであれば、タイムリーに道徳の授業として実施してほしい。

③ 教師の願い・感動を授業に

道徳の授業は、「子どもたちへの先生からのメッセージ」であると常々考えている。先生のコミ上げる熱い思いが道徳の授業という形になることが理想である。そのためには、先生自身がさまざまなことに感動する心を持っていなければならない。先生の体験が道徳の資料の一つにもなる。

私は、新聞の記事やコラムを読んでいて、感動したり共感したりするとすぐにスクラップしている。また、感動した本もいくつか道徳の資料にしようと考えている。「世界がもし100人の村だったら」「『あなたへ』のゆうき・しあわせ」「問題な日本語」「生き方上手」「もったいない」など、使いたい作品はたくさんある。特にノーベル平和賞受賞者のワンガリ・マータイさんの日本で見つけた言葉「もったいない」は、環境教育と結びつけることもでき、道徳だけでなく他の活動や教科とも関連づけた学習にも広がっていく。

資料はもらうのではなく、自分で見つけてこそ、感動ある授業になる。教師の願いや感動を道徳の授業と結びつけてほしい。

資料選択の前に考えておきたいこと

大分大学教育福祉科学部附属小学校教諭 木村 睦男

はじめに

私たちは、1時間の授業の前に何を考えればよいのだろうか。改めて問われると、難しいが、一つ言えることは、「子どもにどんな力をつけていくのか」ではないだろうか。

目の前の子どもの実態から、「こんな子どもになってほしい」と願い、日々授業に取り組んでいるはずである。

「子どもの実態ありき」。これを語らずに、授業についてのノウハウはないと考えている。

それをふまえたうえで、1時間の道徳の学習組織を考えていくために必要なことを想定してみた。

I. 学習指導要領の解釈から始める

1. 道徳教育の目標を解釈する

(小学校学習指導要領「第1章 総則」の『第1 教育課程編成の一般方針』の2より)

「人間尊重の精神を具体的な生活の中に生かし、実現していくことのできる道徳性の育成」

独立した特性ではなく、相互(道徳的心情・道徳的判断力・道徳的实践意欲と態度)に深く関連しながら、道徳性を構成していく。

2. 道徳の時間の目標を解釈する

学校の全教育活動全般を通じて行う道徳教育の目標を受け継いでいる。

①計画的、発展的に指導

②補充・深化・統合

③道徳的实践力の育成

道徳的实践力 道徳の時間の指導において、計画的・発展的に培う
道徳的实践 教科・特別活動・総合

的な学習の時間等で実践的に深める
お互いに相互補完していく。

道徳の時間の3つの特質をふまえる。

特質①：子ども一人一人が自己を見つめる

特質②：子どもが価値を内面的に自覚する

特質③：子どもが主体的に道徳的实践力を身につけていく

II. 道徳の学習の学習指導過程から考える

学校研究の学習指導過程にそって考える。

道徳学習時間のめざすもの

主人公の生き方(見方・考え方・感じ方)に出会い、自己との生き方とつなぐことで、よりよい生き方を求めていく。

基本的な指導過程

問い1...主人公の行為と自分の生き方を
つなぐ問い

問い2...主人公の心の原動力を探る問い

問い3...主人公の心の変化の原動力を見極める問い

問い4...自己のよりよい生き方を求める
問い

I・IIから考える

道徳学習のめざす姿...自分だけでなく、他者とのよりよい生き方を求めていく。

III. 具体例(4年生:「泣いた赤鬼」の実践から)

資料選択をする(児童の実態と、つけたい力から)

(1)アンケート調査(主に自分自身に関する
こと・他人とのかかわりについて〔省略〕)

(2)つけたい力の検討

つけたい力 信頼・友情 2-(3)

相手の立場や気持ちを考えて忠告し合い、

資料名 視点	泣いた赤鬼	貝がら	絵はがきと切手
①		なまりという言葉をやや理解しにくい。	手紙が料金不足についての経験はない。
②	赤鬼のために、自分が身代わりになる青鬼の姿がある。	主人公の考えで、中山君のよさを理解することができた。	友だちが自己変容のきっかけにはなっていないが、友だちを思いやる気持ちがある。
③	自分が村人と仲良くなりたいために青鬼のことを忘れてしまう姿に十分に共感できる。	中山君の気持ちを理解できずに、腹を立ててしまう姿には十分に共感できる。	ひろ子のことをかばうか真実を言うか大いに迷う場面に共感できる。
④	自分ために身代わりになった青鬼に対して、その恩を忘れて村人と過ごしてしまう赤鬼の心情を探り、後悔の涙のわけについて考えることができる。	「中山くんと仲良しになれると思ったのはどうしてか」と考えさせる根拠が、心の葛藤からではなく、中山君に寄り添うことで推測する。	正子（主人公）が、ひろ子に対して、母親と兄の2人から話を聞き、迷いながら、どうするのがいいのを探らせやすい。
⑤	青鬼の行動からの自分の姿を振り返り、本当の友だちの大切さを気づくことができる。	お互いのよさを理解し合うことで友情がうまれることを考えさせることができる。	迷いながら、ひろ子のためには知らせることがよいことだと気づかせることができる。
⑥	相手のことを考え、本当の友だちとは何かを考えさせ、ともに助け合い理解し合おうとする心情を養うきっかけになる。	今までどのようにして、友だちと仲良くなってきたのかを考えさせることで、自分の生活を振り返り、お互いのよさを尊重しようとする意欲を持つことができる。	お互いの立場に立って、相手のために忠告し合うことが、友情を深めていくうえでは大切であることに気づくことができる。

ともに向上していく。

健康的な仲間集団を積極的に育成するため

相手の持っているよさに目を向け、相手の向上を願い、真心をもって進言できる姿

(関連 1 - (1)・1 - (4))

(3)資料選択の視点

①主人公のおかれている状況や人柄がとらえやすいか。

②主人公と友だちとの関係
主人公の生き方にどのような影響を与えているのか、変容のきっかけの要因とする。

③主人公の人間的な弱い心への共感ができるか。 **問い1**

子どもが主人公と重なり合う部分が重要

④葛藤の心と自己変革のきっかけがあるか。

問い2

葛藤する心が、二つのどの考えにこだわっているのかが明確で、自己変革が友だちの行動・言動等によって行われたのかわかるか。

⑤価値を自覚し、よりよい生き方を求める力がみられるか。 **問い3**

主人公が、葛藤から自分の生き方として決断し、選択していったものは何か、その考

え方を決めたキーワードはあるか。

⑥自己への価値の取り入れ **問い4**

自分の生き方として、「やってみたい」「こうしていけばいいんだ」と、くらしに活かせそうな期待感があるか。

IV. 資料選択の実際

上表のようにして、子どもの実態とつけたい力の把握を行ってきた。その後、この子どもの実態とつけたい力に合う資料を選択していった。

おわりに

「泣いた赤鬼」は、公開研究会の提案授業として行った。そのために、やや普通の授業よりは綿密な教材の分析をした。そして、子どもの実態に合うような教材を前後の学年から選択したことも事実である。

しかし、どの授業においても、考えることは「子どもの実態」と「つけたい力」であることは間違いないと思う。

今後は、年間指導計画の再検討を含め、年間35時間の指導時間と資料の見直しを考えていく必要があると考えている。

道徳の授業の前におさえたい 5つのポイント

川口市立慈林小学校教頭 小林 優子

1 子どもたちは、今 ...観察そして調査...

道徳の授業は、担任ならではの仕事です。子どもたちのことをよく知り、「A子の心に沿うように」「B夫のよさを紹介しよう」「こういう学級にしたいな」というわくわくするような思いを味わえるのは、すばらしいことだと思います。

わたしが、道徳の授業の前に、第1に考えるのは、「**子どもの実態**」です。

「わたしの学級の子どもたちは、今、この価値内容にてらして、どういうところにいるのだろう。何ができていて、何が課題なのだろう。」そう思いながら、学級全体の様子を思い出したり、名簿や個人カルテを利用してチェックしたりします。残念ですが、そういうときに、「わたしは、一人一人の考えや体験をよく知らないのだ」と気づかされます。

そこで、知りたいことを質問にして、アンケート用紙を作り、調査します。これまでに観察などを通して把握したことにアンケートの結果を加えて、この時点での実態とします。

実態調査をすると、その子の思わぬ考え方や悩み・よりよく生きたいと願っている子どものニーズがわかったり、ほかの子の善い行動を教えてもらったりすることがあります。

2 ねらいとする価値内容は ...わかっていますか...

子どもの実態がわかってきたら、第2に考

えるのが「**価値**」についてです。学習指導要領の解説書を改めて読み直します。本学年の解説書、その前後のつながりも確認します。

でも、価値の内容が、はっきりとは、わからないこともあります。そういうときは、「道徳内容の研究」のような、内容項目について解説している参考書も読みくらべます。「友情の特質は、切磋琢磨である。」思慮反省についても、「思慮とは行動する前の心の働きで、反省は行為を行った後に振り返って考えを見つめなおすこと」など、今まで考えてこなかったことが明らかになってきます。価値内容がよくわかると、1時間のねらいも明確になり、的確な発問も考えることができます。

3 取り上げる資料は ...「おすすめ」の資料を...

第3は、「**資料の選択**」です。

どちらの学校でも、道徳の年間指導計画には、主題名とともに資料名が記載されています。毎年毎年、各学級・学年での実践をもとに改善されている計画なら、選択されている資料も実態に合ったものだと思います。

でも、毎年いろいろな資料が手に入りますし、自作資料やタイムリーな記事もあります。「これは」と思う資料が見つかったら、学年会議で相談したり、道徳主任に提案したりして資料を差し替えて取り組んでみてもよいと思います。

また、学校・学年によっては、調整時数(余裕時数)も多くありますから、年間実施計画時数の35時間以上に実施できる場合もあ

ります。学級経営の重点に道徳教育を掲げている学級なら、調整時数（余裕時数）も計画的に利用したいものです。

わたしは、「これまでのことやこれからのことを考えさせられる資料」「心に残り、これからの生きる糧になりそうな資料」「こうありたいものだとかがれを抱く資料」「課題が解決できそうな資料」など「**おすすめ**の資料」を選択したいと思います。

「おすすめ」の資料が、読み物資料の場合は、子どもの実態を念頭において「書き込み」をしたり、ねらいとする価値内容にてらして考えさせるポイントをチェックします。それを先輩の先生方から「資料分析」と教えていただきました。各教科等で行う教材研究と同じです。子どもを知ること・教材を知ることが、どの授業でも必須です。

4 学習の展開を考える

...どこが深めるポイントか...

...だれを どこで 生かせるか...

第4に「**学習展開**」を考えます。実態把握で得た児童のよさや課題をふまえた展開、資料の特長に応じた展開、担任のカラーや日ごろのいろいろな学習の学び方を生かした展開など、評価も念頭に置いて、学習の展開を考えます。

(1) ねらいを吟味し、評価を意識する

授業には、ねらいがあります。1時間のねらいを実態・価値内容・資料の特色などから設定します。そのねらいに達したかどうか、この授業が終わったとき、どうなっていれば概ね満足なのか（十分満足なのか）を考えます。それには、具体的評価規準と評価方法をもつことが必要です。

わたしは、一か所あるいは二か所で書く活動を取り入れます。書くスペースは、実態と配当時間にに応じて決めていきます。一人一人に自分の考えを見つめてほしいし、わたし自身も子どもたち一人一人をとらえたいからです。

(2) 中心発問から考え、前後へ

時間をかけて語り合う・話し合うポイントを決めます。中心発問です。それは、心の葛藤場面だったり、価値に覚醒した場面だったり、生き方を納得した場面だったりします。また、中心発問の場면을クローズアップし、印象づけ、効果的な語り合い・話し合いにするための工夫をします。場面絵・効果音・大道具小道具・ワークシートやグループ学習・役割演技・意図的な出番の設定などの中からいくつか選びます。

その場面の前後にも発問を考え、中心発問を支えますが、3分から5分と短時間にとどめます。さらに、資料や価値について引き込むような導入と心に残る終末について考えます。板書は、見やすく・わかりやすく・子どもの発言のキーワードで・カードや絵などの資料を利用し、印象深くまとめるようにあらかじめ構想します。黒板も右から左への流れだけでなく、左右の対比・上下・中央から左右へと学習の仕方によって使い分けます。

5 効果的な指導のために

...教科等の指導との関連を...

...学年・家庭・地域と共に...

第5に、1時間の「道徳の時間」の指導を**補い、支え、広げ、深めるための前後の計画**を考えます。

事前学習・事後学習から各教科や道徳の時間、特別活動、総合的な学習の時間などの学習との関連を見直します。それまでに道徳の時間で扱う価値と関連ある内容について時間をかけて各教科等で学習した後なら、語り合い・話し合いも深まります。道徳の時間後でも、補充・深化・統合や意図的な体験・効果的な実践の場になります。

また、学年研修・授業公開や学級通信・『心のノート』・ゲストティーチャーなども視野に入れます。以前に担任した子どもたちの道徳ノートの内容を参考資料として提示することもあります。

授業に協力してくれる人はいないかな

自分一人で授業を組み立てずに地域の人や保護者の参画を考える

福島県棚倉町立棚倉小学校教頭 佐藤 悟

1 授業の基本はしっかり考える

道徳の授業はほぼ一週間に一回実施されていく。その一回ごとの積み重ねが、子どもの心の成長につながっていくことを肝に銘じ、できるかぎりのことを思案して授業に臨みたいものである。

どの授業でもそうだが、基本的なことはしっかり考えたい。授業のねらいは「複数化・具体化」を考慮してどのようにするか、どのような資料を使いどのように提示するか、今までの子どもの体験をどのように生かすか、『心のノート』を使える場面はどこかなど、記録に残しながら考えていく。

2 地域の人々の参画を考える

授業の基本的なことを考えたあと、この授業において協力してくれる人はいないかを検討したい。もちろん自分一人、担任だけでも授業は成立するかもしれない。そのほうがあって自分のペースで授業ができ、つごうがよいかもしれない。しかし、子どもたちのことを思い、また、道徳教育の広がりという点からすると、担任以外にあえて授業に参画してくれる協力者を探したほうがよい。

幸い、それぞれの地域には人生経験豊富な素晴らしい方がたくさんいる。もちろんその方も仕事をもっており、忙しい方が多い。協力をお願いしても断られるかもしれない。しかし、勇気を出してお願いしてみると快く承諾してくれることもある。

学校によっては、地域の「人材マップ」や

「心の先生リスト」なるものがきちんと整備されているところもあるだろう。整備されているのであれば、それを活用して、どのような形で道徳の授業に参画してもらうかを積極的に検討していきたい。

3 保護者や管理職の参画を考える

学級担任をしている教師であれば、保護者がどのような仕事をしているかは把握しておく必要がある。救命救急士、看護師、介護士などの仕事の方は、ゲストティーチャーとして参画している実践例も多いので、日ごろからコミュニケーションを密にしておくことで道徳の授業への参画も依頼しやすい。

保護者がむずかしい場合は、校長や教頭に相談してみるとよい。自分も教頭であるが、どんなに忙しい思いをしても相談されるのはうれしいものである。地域の人材を探してくれるだろうし、また、自らが授業の協力者として立候補してくれるかもしれない。道徳教育に関する話し合いが日常的になされることによって、学校全体として道徳教育の高まりが見えてくるだろう。

4 参画の内容を考える

地域の人、保護者、管理職などの参画にはさまざまな内容が考えられる。私が今まで、授業実践したり参観したりして印象に残っている事例をもとにいくつか紹介してみたい。

(1) 資料の読み聞かせをしてもらう

道徳の授業には読み物資料を使うことが多い。一般的には担任が副読本を読んで聞かせ

る。それをゲストティーチャーの方をお願いしてみてもどうか。前任校の地域で、「手のひらの会」という読み聞かせのボランティア団体があり、道徳の資料の読み聞かせを数回依頼したことがあった。快く引き受けてくださり、授業では、人形劇や紙芝居を交えた読み聞かせに子どもたちはたいへん喜び、その後の授業の展開にも効果があった。ボランティア会員の中には保護者もいて、道徳の授業に対する関心も高めることができた。

(2) 体験を話してもらおう

道徳の授業で使う資料をゲストティーチャーの体験談として提示する方法がある。本人からの話はたいへん臨場感があって子どもの心に響く。救命救急士の菊池正美さんは本校の保護者であるが、仕事の体験から「命の重さ」をテーマとした話を道徳の授業でしたいと志願してくれた。さらに、菊池さんと同級生である井上京子さんもいっしょに来てくれるという。井上さんは自分の子どもを20年前に亡くしている。担任は、事前に打ち合わせをして2時間続きの授業を計画し、実践した。子どもたちと私を含めた参観者全員が2人の話に感動し涙をこぼした。忘れることができない授業になったと思う。井上さんにはこの体験談を文章に話してもらおうをお願いしている。

(3) 体験を見せてもらおう

前任校の地域在住の豊田智子さんは、不慮の事故で手足が不自由になってしまった。介護を必要とするベッドに寝たきりの生活に一時は絶望感を味わった。しかし、自分にできることはないかと考え、口に筆をくわえて絵や文字をかくことに希望の光を見いだした。たいへんな苦労を重ねた結果、今ではみごとな絵手紙を作成できるようになった。まさに星野富弘さんのような方が地域にもいたのである。関係機関の協力を得て、実際に豊田さんの自宅を訪問させていただいた。そして、絵を描いているところを見せていただき、話もお聞きした。子どもたちは、豊田さんの口

に筆をくわえて絵を描く姿を真剣に見ていた。その後の道徳の授業に大きく生かされたことは言うまでもない。

(4) 手紙を書いてもらう

保護者に自分の子ども宛の手紙を書いてもらうことも参画の一つと言えるだろう。我が子に手紙を書くことで親も勉強になるし、親子のふれあいの一つになる。担任は思いつきでお願いするのではなく、年間を見通して保護者をお願いしておくとうい。子どもには内緒で進め、授業の終末で渡す。この実践は、いつも子どもたちはうれしい表情を見せる。年間に何回もできないが、実践意欲を高める工夫としては有効である。ぜひ、「道徳ファイル」や「心のファイル」をつくり、保護者が書いてくれた手紙がいつまでも保存され、数年後にも読み返せるようにしたい。

(5) 「心の先生」として授業を見てもらう

道徳の授業の一回だけの参画ではなく、心の教育の助言者として、総合的な学習の時間や学級活動の授業でも協力いただくことができたらいっそう効果もある。前任校では、全盲の立花政志さんに「心の先生」としてお世話になった。立花さんは、子どもたちのために何度も学校に来て、自分の体験をもとにした講演会や点字の指導、福祉活動の指導をしてくださった。また、立花さんは音楽が得意で、子どもたちにフルートの演奏や自分で作った歌を披露してくれた。そんな地域の「心の先生」が道徳の授業をただ参観してくれるだけでも子どもたちの意識は違っていった。

5 三点セットの活用を考える

このように、道徳の授業の協力者がいれば子どもたちのためになるし、教師としての自分を高めることができる。しかし、毎時間、協力者がいるとはかぎらない。私は、道徳の授業に、三点セットとして「副読本」「心のノート」「心のファイル」をいつも子どもの机の上に置かせることを薦めている。その活用方法を考えることは忘れないでいたいと思う。

子どもとともに よりよい生き方を考える 道徳の授業をめざして

北九州市立長尾小学校教諭 本庄 裕子

1 子どものよさをとらえる

授業をつくっていくのは子どもと教師である。したがって、まず、子どもを理解し、子どものよさをとらえることを大切にしたい。

子どもたちは、今、どのようなことに目を向けているのだろうか、どのようなことに心が動いているのだろうか、一人一人のよさや気持ちを共感的に受けとめる。そのためにも、日ごろの子どもたちの表情や会話、行動、日記、あるいは保護者とのやりとりの中で、子どもの気持ちをキャッチすることに努めたいと思う。

学級経営においても子どもを理解することは不可欠なことである。子どもどうし、また、子どもと教師が心を開き合うことで、お互いの信頼関係も深まっていくのではないだろうか。

つまり、子どものよさをとらえることと同時に、心を開き合い、温かい雰囲気のある学級をつくることにより、道徳の授業もつくられていくと考える。そして、道徳の授業を行うことで、また、学級も高まっていくように思う。

2 よりよい生き方のすばらしさを、子どもとともに考える

道徳の授業の楽しさの一つは、自由に自分の思いや考えが言えることにあると思う。これは、前に述べた学級経営にかかわることである。よりよい学級経営を基盤として道徳の授業は成り立つと考えると、やはり、教師からの一方通行ではなく、子どもと教師の対話が大切である。子どもの思いを受けとめ、教

師も子どもの目線になって、じっくり考え、ともに生き方のすばらしさを共有したり、悩んだりすることを大切に考えていきたい。

これまでの私の授業を振り返ってみると、子どもたちに価値に気づいてほしいと、ともすれば価値を押しつけたり、教師の期待する発言を待っていたりしていたのではないかと反省する。資料の主人公の生き方に対して、自分はどうか、また、自分ならどうするか、と思いや考えを述べ合うときに、教師自身も自分の生き方を見つめ直して考えることが大切だと思う。教師が自分自身を振り返って子どもに語る時、子どもの目の輝きもいっそう増すと感じる。

また、「子どもの確かな学び」を考えたとき、ねらいに対して話し合いの論点がずれないように、教師の発問（何を考えさせるか）や子どもの発言に臨機応変に対応できる判断力（授業のキーワードを瞬時にとらえる）が大切になってくると思う。教師主導の上滑りな授業ではなく、生き方のすばらしさを子どもとともに考えるためには、授業展開をどのようにデザインするか、教師の力量が問われるように思う。

3 お話の世界に浸らせ、心を動かす

資料中の想像の世界を楽しみ、想像を通じた体験は、内的な体験として、道徳性の育成に大きな力を発揮するといわれている。低学年の時期にこそ、お話の世界に浸らせたい。そのためには、子どもの感性に訴え、生きる喜びが感じられる資料を選択したり、自作したりする。また、子どもの体験を生かした共



ペープサートを用いてお話をしている場面



(保護者と話し合う子どもたち)

感性的な資料は、自分を振り返りやすくするので、体験との関連を考えた資料の活用も考えていきたい。

さらに、お話の世界に浸らせ、心を動かすためには、資料提示も大切になってくる。例えば、読み物資料でも、紙芝居やペープサートを使って、ていねいに行いたい〔写真参照〕。子どもの顔を見ながら、ゆっくり読み聞かせていくためには、事前に資料を何度も読む練習もしておきたい。練習する過程で、今まで気づかなかった主人公の気持ちやようすに新たな発見も生まれる。

4 家庭との連携を図る〔保護者参加型の授業 / 1年「ぎんのしずく（家族愛）〕

家庭との連携については、従来も、保護者からの手紙や『心のノート』による啓発等を行ってきた。しかし、教師と家庭とのパイプがもっと太くなれば、双方が一体となって子どもの心を育てていくことができる。「点」から「線」へと発展させていき、保護者と気持ちを合わせて子どもを育てたいと考え、保護者参加型の授業を試みた。

授業では、子どものグループでの話し合いに入り、子どもの意見を聞き、また感想を述べる等の場を設定する。この場は、保護者が子どもたちの多様な思いや考えにふれ、あらためて子どもの成長やはぐくむ価値の意識化の好機となることも期待できる。

子どもの思いを道徳の時間だけですべて受けとめるには限界がある。それを保護者が担任といっしょに受けとめたり、よさを引き出したりすることができた。

今日、子供達のいろいろな意見を聞いて、小学一年生割に親の事もちゃんと理解してくれているなあと感じられました。お話をやさしくかきつけ、一年前まで幼稚園に通ったとは思えないくらい成長した子供の一面を知ることができました。今日は参加出来て本当に良かったです。大変勉強になりました。ありがとうございました。

(授業を終えての保護者の感想)

保護者の感想からも、保護者が楽しく授業に参加し、子どものよさや成長を見取ってくれていることがわかる。保護者を巻き込むことで、子どもとの対話の価値を見直し、家庭でもゆっくり話したいという気持ちをもってもらえることができた。

また、授業を計画するにあたり、事前に保護者と打ち合わせをしたり、授業後に感想を聞いたり話したりする中で、教師と保護者とのつながりも深まった。さらに、連携を深めていくためには、定期的・継続的な取り組みが必要であるように思う。「家族愛」のテーマにかぎらず、他の内容項目でも親と子が心を交える双方の対話を図ることで、子どもの道徳的实践力が高まると考える。

以上4点について述べてきたが、道徳の時間を通して心豊かな子どもを育てるには、教師の子どもに対する受容的・共感的な見取りやよさを見いだす姿勢、個に応じた指導が大切であると考え、今後もこれらを意識した取り組みに努め、教師自身の感性を磨いていきたい。

「学習の方向性」を明確化する

「本時のねらい」を的確に把握するという視点に立って

金沢大学教育学部附属小学校教諭 北川 忠

私は、帰りの会で道徳の予定を知らせないことにしている。「ひ・み・つ」。それは、道徳の時間に初めて資料と出会ったときの、子どもたちが感じる新鮮さと驚きを大切にしたいからである。子どもたちは「先生は、まだ決めていないのかな。」などと言うこともあるが、そんなことはない。私は内心、「どんな感想をもってくれるだろうか。」とわくわくしながらも、「うまくいくだろうか。」と不安な気持ちももちながら、「明日のお楽しみ」ということにしている。

道徳の授業について、私は前任校（石川県小松市立安宅小学校）時代に何度も飛行機で来ていただき、職員一同が指導を仰いだ新宮弘識先生から教えていただいた授業前の準備について、今もできる限り実践するように心がけていることがある。

それは、1時間の学習計画を立てる場合、まず初めに「学習の方向をはっきりとさせる」ということである。つまり、「本時のねらいは何か」である。資料によっては、複数のねらいを定める場合がある。その中で何を子どもたちに伝えたいのか、ということをもまず決定する。決定するためには、その資料のどこに自分が心を動かされたのかを見きわめる。そして、その部分ではたして子どもたちも心が動かされるだろうかと吟味する。40数年生きていく自分と10年足らずしか生きていない子どもたちとは、価値観が異なる場合もあ

る。教師の独りよがりにならないためにも、ねらいとしたい道徳的価値が子どもたちの発達段階や実態に合致しているかどうかを考えなくてはならないだろう。このことは自作資料を作成する場合、特に気をつけることにしている。

次にそのねらいについて、正しく自分が理解しているかどうかを確かめるために、ねらいの内容を学習指導要領で確認して、ねらいのキーワードとなる言葉を辞書で調べる。

こうして自分の中でねらいが定まったならば、ねらいに対して、クラスの子どもの現状はどうかを調査、確認する。必要な場合は、アンケートも採る。そして、そのねらいに到達するまでの道順を考える。これは、授業の流れの中に3つから4つのさらに細かなねらいを立てるということである。例えば、登場人物の心情を考えると、時代背景や周囲の環境をぬきにしては正しく理解できない場合があれば、補助資料を用いて確認しておかねばならない。また、登場人物がある行動をとった原因について、心の奥にある深層の部分にも気づかせる必要があることもあるだろう。これは、中心となる発問に大きくかかわってくるので、よく吟味する必要がある。このようにして、設定する授業の流れにおける具体的なねらいは、例えば一般的な資料であれば、

- ① 登場人物の置かれている環境や状況を理解する。

- ② 登場人物がとった行動について、その行動をとらせた心の内面にある理由に気づき、理解する。
- ③ 登場人物にある行動をとらせた気持ちは、自分たちの中にもあることに気づかせる。
- ④ 今までの自分を振り返り、よりよく生きるために実践しようと思う。

になるだろう。

この具体的なねらいは、大きなねらいを達成するための具体的なねらいである。それぞれの具体的なねらいが達成できたかどうかは、道徳の授業における評価の観点の一つにもなると考えている。

実際の資料をもとにして学習計画をたどってみよう。まず、光文書院『ゆたかな心 新しい道徳』(5年生)から、「ミレーとルソー」を学習すると決めたとする。

授業者の心が動いたところは、ミレーが心からルソーを大切に思う姿である。そして、その気持ちの深さに気づいたミレーのつぶやき、「そうだったのか。」に込められた溢れんばかりの感謝の気持ちに感動する。すぐれた画家であるミレーの才能をだれよりも理解しているルソーは、自信を失いつつあるミレーを何とかして励ましたかった。主題名は「ほんとうの友情」2-(3)。これは学習指導要領によると、「主として他の人とのかわりに関すること。」の中の「互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲よく協力し助け合う。」とある。この中から、「信頼」「友情」をねらいのキーワードとして取り上げることとする。辞書によると「信頼」とは「信じて頼ること」であり、「友情」とは「友人間の情愛、友達のよしみ。友人を思う心、友愛の情」である。

クラスの実態は、友達といっしょによく遊ぶが、自己中心的な行動や言動からけんかもすることがある。しばらくすると仲直りするということの繰り返しである。しかし、友達が困っていれば手を貸すこともあり、お互いによい人間関係を結びつつある途中の段階で

あるともいえる。この段階の子どもたちに対して、この資料から「真の友情について学ばせたい」というねらいを立てることにする。つまり、相手を大切に思う心(友情)が、お互いの信頼を生み、感謝の気持ちから、さらに絆を深めていくということに気づかせたいというねらいを設定する。

次に、ミレーの作品とルソー(テオドール・ルソー)の作品を用意して、授業の導入部で2枚の絵を提示することにする。そして彼らの作品から、二人ともすぐれた画家であることを子どもたちに確認させることにする。後年世界的に有名になったのはミレーのほうであるが、当時のミレーはまったく絵が売れなかったということは大切なポイントであろう。

こうして授業の導入部からさらに具体的なねらいを設定していく。

- ① ミレーとルソーについて、それぞれの当時の様子を理解する。
- ② ミレーに対するルソーの思いがわかる。
- ③ 友達を大切に思う気持ちは、自分たちの中にもあることに気づく。
- ④ 今までの交友関係を振り返り、よりよい関係をつくっていかうと決意する。

いうまでもないことだが、授業の中心は②のねらいがどこまで達成できるかにかかわってくる。ルソーに行動をとらせた心の深層部分に、子どもたちがどれだけ迫れるかが重要であると思う。

このように準備、計画をして授業に臨んでも、思い通りにはいかないことがよくある。それでも、子どもたちは一生懸命に考えてくれる。そして、たまには教師の体験談も話すことがあるが、私の場合、ほとんどが失敗談である。失敗の繰り返しをしてきたから、失敗談のネタには困ったことがない。恥をさらすようではあるが、笑顔で聞いてくれる子どもたちがいる。だから、道徳の授業はおもしろい。

子どもが 道徳について、 親や友達と会話をするようにしよう

八洲学園大学教授 渡邊 達生

1. よりよく生きるための指針となる言葉

人がよりよく生きるための観点としてまとめられた言葉がある。

節度、反省、努力、正義、勇氣、明朗、礼儀、親切、友情、自由、公德心、勤労等々。

これらの言葉は、道徳の内容を示す言葉でもあり、その本質を理解することで、よく生きるヒントが思い浮かぶ。また、これらの言葉と生活状況の接点を見つめることで、子どもはよりよく生きることへ意識を高めていくことができる。道徳の時間はその一環である。

しかし、これらの道徳内容を示す言葉の使用は、道徳の時間に、教員と子どもが語ることにだけに終始しているのではないか。

各教科や特別活動での道徳教育でもこれらの言葉はあいまいにされているようである。道徳の時間は、全教育活動での道徳教育を補充・深化・統合するものである。カリキュラムを見ると、総合的単元として、各教科・特別活動の時間と道徳の時間とはつながりをつけてあることが多いが、それは教材の配列に視点を置いた考えからでることが多く、子どもには各教科や特別活動の時間でのことが道徳内容を示す言葉で理解されずに、道徳とは別という意識になっているのではないだろうか。

また、各家庭に道徳内容を示す言葉を知らせることや、その言葉への理解を求めることもあいまいにしてはならないだろうか。道徳内容が多岐にわたっていることを、各家庭に、ぜひ知らせたい。それが学校・家庭の連携の手始めとなる。そして、各家庭で次のように家庭教育が始まることを期待できよう。

* 様々な視点をもとに子どもの生活を見る

* 家庭生活を道徳実践の場面とする

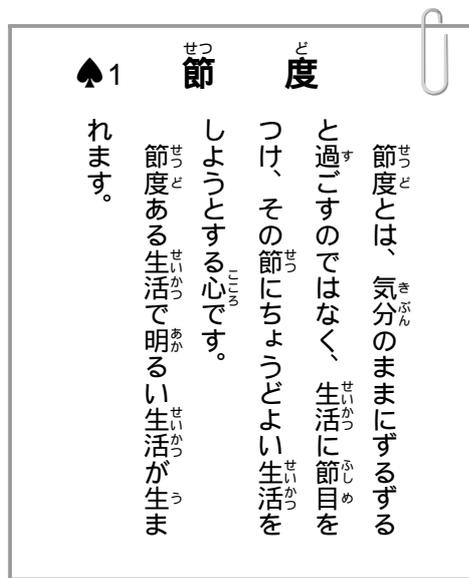
* 親は子どもの道徳的行為の手本となる

* 親と子どもで共によりよい生き方をめざす

2. 「道徳カード」の作成

かつては、道徳内容を示す言葉は、日常生活の中で、個人の生活や周りの社会をよくしていく手がかりとして用いられていた。

そこで、そのような状況を、家庭や学級の中につくり出すために、「道徳カード」として、次のようなカードを作成した。



カードの上段には道徳内容を示す言葉がある。下段ではその内容を説明する。そして、最後に、その道徳的な行為が生活を改善していく視点を示している。

このようなカードを、道徳内容ごとに作成した。なお、裏面は全部同じ模様で、トランプとしても遊べるようにしてある。

3. 「道徳カード」の使用例

家庭では親子で、学級では数人のグループで向かい合って座り、リーダーを決める。リーダーはカードの束をよくシャッフルして、相手に引いてもらう。引いた人はそのカードをリーダーに渡す。リーダーはそのカードを読み上げ、「〇〇さんに、このようなことがあったら教えてください。」と話しかける。

親子で行う場合は、まずは、子どもがリーダーになるとよいだろう。このカードをお父さんが引いた場合には、子どもは、お父さんに次のようにたずねることになる。

「節度。節度とは、気分のままにずるずると過ごすのではなく、生活に節目をつけ、その節にちょうどよい生活をしようとする心です。節度ある生活で明るい生活が生まれます。お父さんに、このようなことがあったら教えてください。」そして お父さんが自分の体験を話すことで道徳を介してのコミュニケーションが始まる。しつけでは、親は子どもを叱りがちになるが、このカードでは、子どもは目を輝かせて聞くに違いない。

また、親がリーダーになれば、子どもの体験を聞く機会となる。幼いころからこのような習慣をつけることで、子どもが成長してからも、親子での会話の機会が持てよう。

♠3 不撓不屈

不撓不屈とは、辛いことに出会ってもくじけずに目標に向かってがんばることで自信ができ、自分をかえるチャンスがやってくる。

♠6 勇氣

勇氣とは、自分を励ます心です。しようとしていることが「よいことだ」という気持ちで、自分を奮い立たせてくれます。小さな勇氣が、自分を少しずつかえていきます。

♠10 明朗

明朗とは、自分を前向きに明るくしようとする心です。暗くなりがちな時にも明るくしようとする心で、自分は「つよく」なり、周りの人からは信頼されます。

学校では学級活動の時間に使って、子ども相互で自由に対話を進めると、各教科や特別活動でのことが、話題にのぼってこよう。それによって、すべての教育活動は道徳と関係していたことがわかってくる。道徳の時間での補充・深化・統合への橋渡しもできよう。

現在、1セット53種類のカードを、100セット作成して、家庭や学校での効果を実証しようとしているところである。

「年をとることへの畏敬の念」を深く刻む道德教育

～川島ならでは 三保谷だからこそその 道德教育～

埼玉県川島町立三保谷小学校校長 藤田 清千

1 地域の教育力を維持発展させる道德教育
四囲河川が廻る水田の中にある本校，11年
目，児童122名は皆“よい子”たちである。
川島の習わしを守り続ける“家”と，ほとん
どが祖父母と暮らす環境がその源泉である。

この人たちの子どもへの願いはどこにある
か。一つは，我が子が「夢に向かって進んで
いく」こと。これは全国同じだろう。もう一つ
は，「祖父母に優しくあってほしい」こと。こ
の地らしい願いだ。朝に夕に，母屋に行き元
気に挨拶できる孫であってほしいと思うのだ。

そんな三保谷の住環境も，高速道のインタ
ー開設目前となり，地域の教育力を維持して
いた条件が揺らぎ，三保谷の子どもも危うい。

そうした中で，道德教育を学校として取り
組んだ意義は大きかった。平成16・17年度文
科省委託「児童生徒の心に響く道德教育推進」
事業指定校としての成果は，当初の予想を越
えるものとなった。子どもたちの変容は，そ
れぞれの家族に，具体的な行動として現れ，
その絆を深めるものとなった。地域に返せる
学校研究となった。以下実践の一部を記す。

2 取り組みの内容

(1) 前提として

<川島の子は「二つの学力」をつける>

かつては，川島に育つ子ならば皆身につけ
ていた知識と技を「川島ならではの学力」と
呼び，学習指導要領の目指す「全国共通の学
力」と対峙させて「二つの学力」という視点
を提示した。それが，国語や算数の勉強に劣
らぬものであり，祖父母の身体に知恵として
在ることを誇りに感じてもらおうとした。

(2) 「二つの学力」観から道德を見直す

<「川島ならではの道德教育」>

祖父母と共にある川島の暮らしにふさわし
い「川島ならではの道德教育」として，内容
項目の重点化を強く図った。「年をとること
への畏敬の念を心に深く刻む」道德教育で
ある。三保谷に暮らす人が，何かを“なす”
存在から，ただ“ある”存在へ心配なく入っ
ていける未来の家族の心根を育てるのだ。保
てなくなった人間の尊厳を祖父母に代わり保
ってあげられる。何事も“なさなくなった”
人が“なしている”何かを感じられる家族
づくりのお手伝いである。

また，年をとることへの畏敬の念とは，「時
間の中で磨かれていく人間の美しさ」と同時
に，「それが壊れていく定めにある“哀しみ”」
という二つの気づきの中に生まれてくる感性
ではないかと，徐々に考えが固まってきた。

(3) 道德の授業への回帰<考える道德>

① 重点化にかかわるねらいの構造化

本校の研究の特色は，重点化を強く打ち出
したところにある。すべての内容項目を調和
的に扱いながらも，「年をとることへの畏敬
の念」という価値にすべての項目が収斂する
ように構造化し，重点的指導を図った。具体
的には，低中高別に，「年をとることへの畏
敬の念」の価値にかかわりの強い内容を4つ
選択し，授業回数を増やした。

当初は，1時間ごとにかかわりのある内容
を薄墨のように忍ばせることで構造化を図ろ
うとしたが，永田教科調査官のブロック組み
上げ論をヒントに修正した。ブロックを一つ
の内容とすると，道德の時間はブロックをつ
くる場であり，組み上げるのは子どもである。
そこで，学ばれた内容が畏敬の念へ「心のベ
クトル」として結実される場が必要となる。

学校生活と、地域の暮らしである。それらは、総合単元的道徳学習およびコンパクトな関連的指導の計画で、機を逃さず生かしてきた。

② ねらいにかかわる哲学を磨く

授業において子どもたちの対話が深まるよう、指導案検討段階で職員相互の考えの披瀝、再文章化により教師自身の哲学を深めようとした。対話や思考を促す教育技術等は、それによってこそ生きていくものだからである。

③ ねらいの複数化・具体化

新宮弘識先生より、子どもの心を揺り動かす授業実現のための「ねらいの複数化」を指導いただいた。道徳的価値に気づく「心が動く」、道徳的価値が「わかる」、道徳的価値は「自分にもある」という自覚、実践意欲の「実行の場」という4観点から「資料に即したねらい」を毎時間分析し臨んだ。これは、子どもの心の有りようを精密にシミュレーションすることであると感じた。「心のスモールステップ」を分析しておくことで、いっそう考えを深めさせる「切り返し」が可能となっていく。

また、この4観点は、同じ内容項目をさまざまな資料により学ぶ過程で、その時々の実態により一つだけ重点観点として選ばれ、軽重をつけたことは言うまでもない。

④ 地域素材の発掘・資料化

前身を寺子屋に発する本校には、卒業生の中に道徳的価値を体現する歴史上の人物が複数いる。それを、孫に一度しゃべれば消えてしまう今までのような人物語りでなく、道徳的価値まで伝えられるよう資料化を図った。総合的な時間や社会科、校内掲示や人物に合わせた賞の新設等、学校生活に広く生かした。

⑤ ゲストティーチャーの生き方に触れる

ゲストとは一過性のつき合いではなく、地域文化の守り手として人間そのものを理解しようとした。ゲストは皆、子どもがわかり、授業では名を呼びながら話をする。いっしょに給食を食べ、授業後も交流が続く。子どもは、よそのお年寄りへ尊敬の眼差しを送り、翻って自分の祖父母を尊敬し直す。

他にも、子どもは、さまざまな三保谷の人物に出会った。インタビューされる大人は、改めて自分たちの郷土への知識の曖昧さを克服しなければならなくなった。何より“立派な”土地の人物として応えねばならなくなった。

⑥ 子どもを見取ることで

「語り、綴れ、聞いて、考えを深められる子ども」をめざし、抽出児童の記録をとることで全員の変容を見取ろうとしてきた。言動・日記等の集積を、分析しながら心の軌跡を辿った。また、重点内容にかかわるその子の変容を年間を通して表にし、授業に臨んだ。また、内容にかかわる全員の現状は座席表にし、各児童への願いを明らかにして臨むようにした。

(4) ふれ合いを通し暮らしの中で鍛える

① 『心のノート』を学校・学級経営の柱に
地域向けのビジュアルな学級経営案や朝会や各種挨拶、学級だよりや掲示物へ積極的に活用を図った。授業後の家庭への持ち帰りによる対話の発展も図った。交換される連絡帳の中味が深まってきた。家族内の対話が深まってきたことがわかる内容である。

② 「川島ならでは」の挨拶指導

田植えの時期には「朝仕事をする田の中の人に聞こえる元気な声で挨拶しましょう。」等、農事に合わせた指導をした。子どもの声で、お年寄りたちに元気なってもらおうとした。

③ 祖父母と孫を結ぶ課題の出し方

「読みはおばあちゃんに聞いてもらいましょう。」「九九をおじいちゃんとお風呂で唱えましょう。」と三、四世代で住む家族構成に合わせ投げかけている。

3 取り組みの成果

お年寄りたちが持っていた技に驚くだけでなく、祖父母の人生の努力にも目を向けられるようになり、尊敬の気持ちが深いところで育ってきた。そして、百年を超える先祖まで視野に入れようとしている。今向きでないはずの「三保谷豊年踊り」をおもしろく感じ、どこでも踊れる子どもとなっていることが、何よりの心の柔らかさを証明している。



Q：授業の前半では活発に発言できた子どもたちも、授業が進むと発言が少なくなってしまうことが多いのですが……。

A：道徳の授業の前半の学習活動は、生活の一場面を思い出させて、「こんなことがあったね。」「あのときはこうだったね。」というような発問から学習の方向づけをしていく導入部分であったり、資料を読み、その内容を確認し合う話し合いが多いですよ。

そのような場面では、子どもたちは、みんなが知っていることや共通体験していることの実事確認ですので安心して答えることができます。そういう意味から、活発に手が上がり発言することも多くなってくるのだと思います。



Q：その活発な話し合いが、次の段階になると低調になり、持続していきないうのはどうしてでしょうか。

A：その事実確認の場面での発表が多いからといって、道徳の学習が活性化していたかと考えると、「？」がついてしまいます。

だれが発表しても同じ内容である事実確認の場面ではなく、道徳の時間での話し合いの場は、自分の思いを表現し、互いに交流し合う学習活動として位置づけたいものです。

その話し合いの学習活動の大切さをしっかり見据えて、そこでの話し合いに子どもたちが生き生きと取り組めるような授業展開を工夫してみたいですね。

一人一人の思いや考えをどのように引き出し、どのように受け止めさせるかが大切であり、教師の役割でもあります。



Q：「話し合い活動」で気をつけなければいけないことは、どのようなことですか？

A：いつも同じ子どもたちだけの発言で話し合いを進めてはいませんか？

- ・発言力のある子どもたちとの一問一答で終始してしまうと、ほかの子どもたちの意見が埋もれてしまいます。
- ・「同じです。」「もう言われました。」ではなく、同じ内容の意見であっても、自分の言葉で発言する習慣を身につけさせたいですね。

自分の思いや考えを確立させる時間を十分にとっていますか？

- ・理解力のすぐれた子どもたちはすぐに発言を求めてきますが、みんなの考えがまとまるまで待つ姿勢を、教師ももちたいですね。
- ・自分の意見を表現することが苦手な子もいます。前もって把握しアドバイスをするなど、発言しやすい環境を整えておきましょう。

自由に伸び伸びと発言しやすいクラスになっていますか？

- ・言いたいことを勝手に言い合うということではなく、しっかりと聞き合えるという雰囲気も大切です。
- ・「聞いてくれるから発表しよう。」「同じ考えかな。それとも……。」という気持ちで話し合い活動を進めたいですね。

＜明日の教育を考える＞

新しい教育についての考え方

八洲学園大学教授 山本 恒夫

はじめに

この2、3年の間に、これからの教育の方向を大きく指し示す中央教育審議会答申が出された。その1つは、平成15年3月の中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について」であり、もう1つは、教育費の国庫負担金問題の検討から、義務教育、教育委員会全般についての見直しを行った中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」（平成17年10月）である。

ここでは、新しい教育の根本にふれた教育基本法についての答申を取り上げ、その根底に新しい教育についてどのような考え方があるのかを調べてみることにしよう。これは、案外知られていないからである。

① 調和・バランス・均整のとれた教育を

21世紀は従来にも増して変化の激しい時代になるとされ、流動性が社会の特徴になるとされている。実は、そのような状況になると、人間や社会は、調和のとれた発達、発展を図らないかぎり、衰退してしまう恐れがあるといわれる。教育基本法の答申は、その点に危機感を募らせており、これまでのようなあれかこれかといった二項対立的な考え方を排して、調和・バランス・均整などを発想の根底に置いた提言を行っている。それが、この答

申の大きな特色であろう。

たとえば、個人レベルでの「心の豊かさ」と「たくましさ」の並置による均整の重視、社会レベルでの「個」と「公」のバランスの重視、国際社会（グローバル社会）レベルでの「国際社会の一員としての意識」と「郷土や国を愛する心」の並置による両者の調和の重視、などがそれである。

個人レベルでの「心の豊かさ」と「たくましさ」では、最初「たくましさ」のみであったものに審議の途中で「心の豊かさ」が加わった。これからの変化の激しい時代を生きるために、「心の豊かさ」と「たくましさ」の均整のとれた発達を図る、つまり、一人一人が「心の豊かさ」と「たくましさ」をそれぞれ個人の中で関係づけて、激しい変化に対応し、未来への道を拓いていけるようにする、というのである。

社会レベルでの、「個」と「公」のバランスの重視については、答申で「すべての国民は、一人の人間としてかけがえのない存在であり、自由には規律が伴うこと、個と公のバランスが重要であることの自覚の下に、自立した存在として生涯にわたって成長を続けるとともに、その価値が尊重されなければならない」とされている。

国際社会（グローバル社会）レベルの「国際社会の一員としての意識」と「郷土や国を愛する心」についても、答申では「グローバル化が進展し、外国が身近な存在となる中で、

我々は国際社会の一員であること、また、我々とは異なる伝統・文化を有する人々と共生していく必要があることが意識されるようになってきた」ということを前提としており、「そのような中で、まず自らの国や地域の伝統・文化について理解を深め、尊重し、日本人であることの自覚や、郷土や国を愛する心の涵養を図ることが重要で」、「さらに、自らの国や地域を重んじるのと同様に他の国や地域の伝統・文化に対しても敬意を払い、国際社会の一員として他国から信頼される国を目指す意識を涵養することが重要である」というように、「国際社会の一員としての意識」と「郷土や国を愛する心」の調和を重視しているのである。

二項対立的にみれば、このような調和・バランス・均整は発展や創造を阻止しそうだが、そうではないであろう。激しい変化や危機に対応でき、問題・課題の解決、創造、発展を図って未来への道を拓くことができるのは、調和(harmony)、バランス(balance)、均整(regularity)のとれた「考え方」や「行動の仕方」である。なぜなら、調和・バランス・均整というのは、活気や発展、創造を生み出すことができるように、全体がうまく関係づけられた状態のことだからである。もし調和、バランス、均整が保たれていながら、事態の停滞が生ずるとすれば、それは見かけ上の調和、バランス、均整でしかなく、ほんとうは調和、バランス、均整のとれていないぎくしゃくした状態なのであろう。

② 生涯学習社会の実現を目指す

この答申では、これまでになかった生涯学習の理念を教育基本法に新たに入れる必要があるとされている。

答申では、現行の教育基本法の普遍的な理念を保持し、新たに、変化への対応ができて、未来への道を拓くことのできる人間を育成するための理念を加えることが提言された。生

涯学習の理念もそれに含まれ、次のようにいわれている。

「今日、社会が複雑化し、また社会構造も大きく変化し続けている中で、年齢や性別を問わず、一人一人が社会の様々な分野で生き生きと活躍していくために、家庭教育、学校教育、社会教育を通じて職業生活に必要な新たな知識・技能を身に付けたり、あるいは社会参加に必要な学習を行うなど、生涯にわたって学習に取り組むことが不可欠となっている。教育制度や教育政策を検討する際には、これまで以上に学習する側に立った視点を重視することが必要であり、今後、誰もが生涯のいつでも、どこでも、自由に学習機会を選択して学ぶことができるような社会を実現するため、生涯学習の理念がますます重要となる。」

ここでいわれている「誰もが生涯のいつでも、どこでも、自由に学習機会を選択して学ぶことができるような社会」というのは、生涯学習社会である。

今後、我が国で、自由に学習機会を「選択」して「学ぶ」ことができ、その「成果が適切に評価される」ような生涯学習社会を実現するためには、“学習機会選択への援助”“学ぶ機会等の充実”“適切な評価のためのサービス”という三者の均整のとれた仕組みを作る必要がある。これからの少子高齢社会は、そのような均整のとれた生涯学習社会の仕組みを持つことによって、新たな道を見いだすことができるようになるに違いない。これからの取り組みが期待される。

